

## はじめに

『早産児』『低出生体重児』『医療的ケア児』『リトルベビー』  
『NICU』

これらの言葉は、私とは無縁の世界にあるものだと思っていた。

まさか自分が、切迫流産で緊急入院し、早産を経験するなんて。想像したこともなかったし、正直、想像なんてしたくなかった。

出産前の私は、小学生のころから陸上競技に打ち込み、マラソンや登山が大好きな体育会系だった。

「1%でも可能性があるなら挑戦したい」「とにかく前へ突き進む」そんなマインドを信じて疑わなかった。

しかし、664gで生まれた小さな命・ういちゃんと向き合うなかで、私は初めてこう思うようになった。

「立ち止まってもいい。後ろを振り返ってもいい。時には後退してもいい。それは、これから前へ進んでいくための"パワーチャージ"なんだ」と。

この考えに出会ったことで、焦る気持ちを抑えられるようになり、物事を俯瞰して見られるようになってきた。そして、他者と比べるのではなく、自分自身の「過去」と「現在」を比べて生きることの大切さを学んだ。それは、ういちゃんだけでなく、きょうだい児、そして私自身へのまなざしにも変化をもたらした。他

者と比べないことで、驚くほど心が軽くなるものだ。

NICUでの子育ては、まるで出口の見えないトンネルの中を走っているような日々だ。

どこへ向かっているのかもわからず、「なぜこの子はこんなに強いのだろう」と問いながら、ただただ目の前の命に向き合ってきた。

毎日、会いに行き、触れて、声をかける。その繰り返しのなかで、はじめに感じていた孤独は、少しずつ変化していった。

ファミリーセンタードケアの取り組みに力を入れている長野県立こども病院NICUで過ごすなかで、命がどうなるかわからないわが子に対して、家族が関わってもよいと感じることができた。「むしろ医療の力だけではない、家族の関わりが、絶大な生きる力になる」と、私自身が体感することができた。

そして、ういちゃんを通して出会った多くの人たち。

その出会いがあったからこそ、今のういちゃんがいる、家族がいる、私がここにいる。

想像もしなかった出来事の連続は、ただ「つらい経験」では終わらなかった。多くの学びがあり、つながりが生まれ、そして未来につながるチャンスも得られたのだ。

産科でお世話になった主治医の言葉をお借りするならば、  
「NICUにいる赤ちゃんは、かわいそうな姿ではなく、“頑張っ

いる姿”です」

ういちゃんだけでなく、NICUにいるすべての赤ちゃんたちの生きる力は、私自身の人生観を大きく変えてくれた。

この本では、命の尊さ、命と向き合うこと、NICUの赤ちゃんとの関わり方、そして、支えてくれる家族や医療スタッフ、出会った仲間との絆について、私の体験を通して、心を込めて綴っていく。